られているんです。

——日本でも、ノイバウテンとかキャバレー・ヴォルテールが流行った時期ってあったじゃないですか、80年代に。その後って、日本では熱が冷めちゃうとそういうことをやっている人っていなくなっちゃうし、考え方を継承している人もいなくなってしまうけど、イギリスってそういうものって脈々とあるんですね。

CMJK：ええ。伝統芸という感じがありますよね。インダストリアルな流れで言えば、キャバレー・ヴォルテールやノイバウテンみたいなのがガーンとあって、アフェックスなり新しい人もいますって感じなんですけど、もうひとつ別な考え方もあって、ギターとか打ち込みとあまり関係ないものをプログラミングされたオケに乗せてしまっておもしろい感じに仕上げているアーティストもたくさんいるんですよ。たとえば、スティーヴ・ヒレッジのシステム7とか。

——スティーヴ・ヒレッジといえば、元祖プログレ・バンド、ゴングにいた人で40歳過ぎていきなりハウスでよみがえっちゃったという。

CMJK：アルバム『777』などは“どこがギターなんだよ”って感じなんですけど、上モノはかなりギターでやっているらしいんです。これも、ノイズ・ループの発展形だと思うんです。あとギターということで言えば、シェイメンのギターの使い方がすごくおもしろいと思うんですよ。僕もよくやるんですけど、ディストーションかけてパンクっぽくガーンと白玉で弾いたものにドローマーの202のゲートをかけて、ハットがチッチッチと打ったとおりにゲートで切るっていう方法。そういうギターであったり同期できないものを上に乗せてしまうという考え方がおもしろいですね。

——たとえば、1回サンプラーに取り込んで、鍵盤のトリガーで出すというやり方でもできますよね。それでなくて、なぜゲートなんでしょうか？

CMJK：やっぱり…鋭い切れ方で、鍵盤とは違うんですよ。バッバッババッバッという音と音の間は、まったくの無音。それは鍵盤でやると、なかなかそうはいかない。暴力的な手法なんです。イギリスの人は、けっこう使いますね。声までやりますから。単純に、向こうだとコンピュミックスないですから、ノイズを防ぐために、ほとんどすべてドローマー通しますでしょ。そこから生まれた発想だと思います。ケガの功名というか。

『777』System7（輸入盤）

●神経逆なでするような音で1曲作ってみよう

——もう1枚、キャバレー・ヴォルテールのリミックス・アルバムを持ってきていただいてますが。

CMJK：80年代の最初から、実験的なことばっかりやっている人たちじゃないですか。で、大ベテランでありながら、リチャード・カークは別ユニットのスイート・エクソシストをやって、テクノにもちゃんと歩み寄ったりしていて、でもいまだに実験精神を失っていない。“歩くノイズ・ループ”というか。最近の彼らの作品を聴くと、いまのテクノとどう違うんだって感じなんで、だから今日はこれを持ってきたんです。

——これって、自分でリミックスしたんですよね。

CMJK：そうです、基本的には。オルタネイトが1曲ミックスをやってますが。たとえば、ラジオのノイズであるとか、日常に転がっているものをサンプリングするのもおもしろいと思うんですけど、それはあたりまえなわけで、とくにみなさんに言いたいのは、アナログ・シンセに関して違った考え方をしてみようということなんです。たとえば、卓で歪ませてみるとか、あるいはギター・アンプを通してみるとか、わざとカセットテープに落としてみたり、安いエフェクターをかけてみるとかといったことをやってみるとおもしろいと思います。で、コードがぶつかるというのは気にしないで、実験的にやってみると、おもしろいものができると思うんですけど。そういう延々続くノイズ・ループから、急にキレイなコードが出てくるとカッコいい。楽曲としてカッチリ作るというのも大事なんですけど、「神経逆なでするような音で1曲作ってみよう」という発想も大切なんじゃないかと思います。

『TECHNOLOGY WESTERN REWORKS 1992』
CABARET VOLTAIRE（輸入盤）

——キーボード寄りの人も、ギター・アンプとかコンパクト・エフェクターとかをチェックしたほうがいいですよね。

CMJK：だと思います。デジタル・シンセだと、勉強すると、ある程度のクオリティの音ってみんな出せるんですけど、それは善し悪しで。「なんじゃこりゃ」という音は「なんじゃこりゃ」という手法によってできるんじゃないか、と思うわけです（笑）。

——ところで、ちょっと話ははずれますけど、最近のリチャード・カークやスティーヴ・ヒレッジの例とか、もっと言えばグリッドってバンドにロバート・フリップが参加していたり、ウルトラマリーンにロバート・ワイアットが参加していたりと、40歳過ぎた人がテクノ／ハウスに接近していますよね。

CMJK：もともとKLFだって、エコー&ザ・バニーメンのマネージャーで38歳で打ち込み始めたということですから。

——そういう動きをどう見てますか？

CMJK：ヘンな話、僕はあたりまえだと思います。70年代のヒッピー的発想や、80年代に培ってきた感性を捨てる必要はないと思うんです。テクノってジャンルの何がおもしろいかというとすべて飲みこめるとこなんです。ヒッピーであろうとプログレであろうと、パンクであろうとジャズであろうと。

——そのへんの寛容さが、いろんな人が侵入してくる理由であると。

CMJK：ええ、そうだと思います。今日はノイズ・ループの話をしていますが、なぜそんなことするかというと、結局その人の“念”“意志”だと思うからなんですよ。それと、おもしろいのは、すごく若い人か、スティーヴ・ヒレッジやアレックス・パターソンのような（ある程度、年齢がいった）人のどっちかなんですよ。ヒッピー、パンク世代か真ん中がなくてファミコン世代。でも、1本の線で結ばれている気がします。サブ・カルチャーというかドラッグ・カルチャーですよね。

●どんな音でもリズムに乗っかると意外とおもしろい

——SEの使い方は？

CMJK：映画の戦闘シーンなどを取ってくるんです。音いいでしょ。「ババババカキーン」というのを「ババババキーン、ババババキーン、ババババキーン……」とループしたりするとおもしろいですよ。キックさえあれば、あとは何もいらない（笑）。そういうの、大好きなんですよ。

——しゃべってる言葉のフレーズを適当にサンプリングしてリバースするとか。網を引き上げてみないとわからない的な手間がかかりますけど。

CMJK：うん、でも手間を楽しんでやらないと、と思うんですよ。あと、民族音楽のボーカルの部分をリバースしてピッチ上げるとか。人間の声って、どんなにバキバキのイジワルなオケの中にあっても、女の人の声とか出てくるとホッとしますよね。

——そうですね。

CMJK：リバースしようがピッチ上げようが、人間の声ってわかると思うんですよ。

——歌わなくても、しゃべっているだけでもリズムがあるから……。

CMJK：そうそう。リズムに乗っかっていたりするとキモチイイですよ、不思議なもんで。ノイズっていうひとつのジャンルがあるぐらいで。だから、毛嫌いしないで“音”だと認識してもらえると僕はウレシイです。ダンス・ミュージックとも仲よしですし。どんな音でも、リズムに乗っかると意外とおもしろかったりするんですよ。

●ダブもはずせない

——たとえば、CMJKが考えるダメなノイズの使い方ってありますか？

CMJK：やっぱりダンス・ミュージックにおいては、ある程度の調和ってどうしても必要だと思うんですよ。あんまりイキすぎちゃうと、タダのノイズになっちゃうなという気がします。

——あとは、抜き方ですか？

CMJK：そうですね。僕はどっちかというとアクセント的に使うのが好きで、そのアクセントがあるからこその楽曲と考えたいです。スシで言えばガリとかサビのようなもので、あるとピリッとしていいかなと。

リアル・テクノの歴史が1988年から始まったとすると、言い替えればそれはノイズ・ループの歴史かなって気がするんです。マーズの「パンプ・アップ・ザ・ボリューム」って曲も、ほとんどラジオのSEだったりギターのノイズなわけで。

——歴史という言葉が出ましたけど、ノイズ・ループの使い方って変わってきてるんですか？

CMJK：ある程度の流行はあると思いますけど。いまクラブに行くと、TB-303とTR-909だけで作ったような、トランジットっていって、トランス＋アシッドという感じの昔のアシッド・ハウスみたいなのが流行ってて、そればっかりじゃちょっとおもしろくないな、と。「誰でもちょっと考えれば思いつきそうだけれど、よくやるなこんなこと」っていう音がないな、誰かやってくれないかなって思ってまして。

いまいちばんおもしろいと思っているアーティストがデチューンって人なんですけど。リズムも上モノも、すべて“なんとか自分なりに加工した音でやったるぞ”って感じで、マトモな音が1コもないんですよ。オペラみたいな音が「ア～ッ」って入ってきたりとか。だけど、ちゃんとダンス・ミュージックとして機能できるんですよ。あとダブっていうのも、けっこうハズせないと思います。

——というと？

CMJK：キング・ダビーとか、エイドリアン・シャーウッドなどのON-U関係とか。ダブって最初はディレイやテープ・エコーとかの偶然の産物だったと思うんですよ。そのダブの発想もノイズ・ループの発想に近いような気がします。興味を持った人は、ON-U関係をチェックしてみるといいと思います。なくてもいいノイズとベースと、重いリズムのコラボレーションというものが聴けます。入門編ということになると、ON-Uだとゲイリー・クレイルだとか。

そういえば、僕の友だちは思いついたメロディを留守番電話に吹きこむんですけど、それをサンプリングして使ってるんですよ。「タララララ～プツッ、プーッ プーッ、タララララ～プツッ、プーップー…」って。

——あははは（笑）。

CMJK：聴き慣れてるじゃないですか。そういうのがダンス・ミュージックの中にポコッと出てくると、ドキッとしますね。独特の音だから。しかも受話器通してるわけで。ぶっちゃけた話、やったもん勝ちなんで、その留守番電話を超えるものを、みなさんに期待したいですね。でも、アイディア一発じゃなくて、ほかのバランスも当然考えてほしいですけれど。